

電子複写不可

南大東島

歩兵第三十六聯隊

第一大隊長

原壽満夫日誌

第一卷

自昭十九、六、十八

至昭十九、十二、三十

複製史料

防衛研修所戦史室



自昭和十九年六月
至昭和二十年三月

日

記

(特一)

原

家

文

天皇陛下萬歲

三十年ノ養心唯此ノ

一日ニ用ニガ爲ナリ

夫レ敬斗ニ目

昭和十九年十一月八日記

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十八日
 野半部長殿へ訪問あり
 直ニ登堂ス

十九日
 月
 夜の敷ニテ編輯其他打合セヲ行フ
 終日ニシテ席温ヨリ敷モナシ
 才ガ衆ノ眼ヲ一掃スル事ノ志氣ノ
 頃ニ昂ルニ至ル事一昨今ヨリ
 一日ニ為テハ勇猛ニシテ半信ニ就ク
 素心カカヤル事ヲ示ルカ感懐ニ也

相承り指予ノ不承迄遂更ニ新カ
上司ノ密ニ事味ヲ感大ニ志ニ共カ
又重更ニ心ノ状更ニ思フヤ其ニ更ニ
有リ。

夢ノ境以下ノ事ノ擧ニ頭下心思不
収善思大尉ヲ送リ占打テ擧ニ教
後殿迄ヲ訪ハテ御礼ヤリ御挨拶又

但御存ノ御家族ノ御存性ニ感謝
迄後ヲ懸リ

仕務概観 異老ノワカ

午節 軍裝検査

訓示

一本決

一熟口実行

一準節同列

訓練部 戦斗ニ戦斗即訓練

得精用ニ會食

再心カシテ相合リテ格期ニ熟リ互ニ満
最後ニ款ヲ盡シテ痛飲ス

口口名始キテノ會食 稍々トシテ奉

二一、三〇 兵舎ヲ光登ス
里旗ニ敷礼ニテ

三二、一五 車中ノ人トナル

未ダ忠快ノ氣ニモ至ラズ 決々心ヲ
託シ、投日來ノ上陸方ハ 飽腹不足
唯 睡人ノミ

三三、目 木

七四〇 暗市著

野望ノ指多クニ 御是道ノヲ受テ
暫時消ス。 一意屋ノニテテ 訪人

〇九一。暗市燈 一路南下トス

勅々々々 樹心ヲ 集セテ
貝吐ル 暗原。 皆名残ヲシノ 別
林系。 野々々々。 暗ノ 向、 邊ノ
放談。 居脚ヲ 以外 走ス 何ニナシ
兵貴ノ 指多クニ 相メテ 漢々々々 揮 却テ
神々々々 見ユ。

三三、目 會

朝ニ 東ニ 托ル。 最後ノ 信ニ 是 際ノ
境ノ 際、 阿リナシ。 其 渡ル
五の 板ニ 創意ニ 尤。 別者 信ノ 業 勝ル

担着ノ指子ヲ送ル。

平壤ノ落成ニ對シテ内一塔唯南進云

水田ニ滿ルルニ水ヲ貯テ貯ル故シテ

思ハス。

スリヤ海城ノ路中一ヲ南中心ニ設ク

洋上ニ飛テ

三月二日

早朝釜山着

午前二時迄。午後五時、船着ク

多ク宿屋關係者見ラリ

船中ヨリ見ル

三ノ二時迄。連絡ス。

三月三日

宿屋關係者其似一連絡者見

瑞送、打金

三月四日

軍旗ヲ迎フ

午後五時ヨリ連絡ニ廻ル

夫等者員、宿屋、船中、陸上關係者、

努力、日漢、ゲマニヤモアリ。

三十一日 金版

野邊、打合也。合、向船め、在子經。
連路。前邊、合、明、
唯一途、最、
雨了。

前邊、
唯、
雨了。

六日

一日 土曜

新送、
箱、
富士山、
富士山、

- 一、
- 二、
- 三、
- 四、

莫不

自今始、其意之始、其力之始、

過去之始、其力之始、

今之始、其力之始、

後之始、其力之始、

アリ、

阿南河下、徳義の力ナリ、

其力ナリ、其力ナリ、

其力ナリ、其力ナリ、

二日 日曜

朝東特快、其力ナリ、

其力ナリ、其力ナリ、

其力ナリ、

大陸最前、其力ナリ、

其力ナリ、其力ナリ、

三日 月曜

其力ナリ、其力ナリ、

其力ナリ、其力ナリ、

其力ナリ、其力ナリ、

夕刻門司沖ニ投錨
約千隻有りナル大船団ノ中ヨリ送
四年日ニ見タル内地山ヲテ威敵ニ耽
モナリ。六年甲辰ノ事ニハ新河並及
威敵ナリ

四日 火曜

瀬戸内海ニ入ル
何回見テモ變ニ平ルモノ。波ノ大ナリ
正午迄平ノ中沖ニ投錨
警戒ヲ報ル令ナル(九九〇〇)
夕刻空襲警報ヲ一警ナリ

雨奇

上村
一蔵カ
前進

五段加多
日初

移乗打合セ。向 持移由ニ干乾存
初ノ氣溜リ年午迄送リ
曇天 内地特有。梅雨模様ナリ

水曜

吳沖ニ投錨。乙午迄ガマリ作業開始
彼ニ入ルニ送リス。
終日何ナリ落付キナリ送ス。
寸陰ヲ惜ミテ勤作セリ。残力ナリ
残力ナリ
立居カテ転ス。
清美。残力ナリ 田舎ノ基礎ナリ

古日本略

早期止り云の光
一船司月二道各三上以事謀
如云三更之広嶋師団三事不事軍裝
諸名ヲ不先・特別ノ考慮ヨリ
根ヲ折期ノ成果ヲ得

長谷川師團長ニ由換

一訓練ニ由ス汗血ニ匹敵ス

二且教一且行

三不辭ノ勉學ノ研究

四辭印ノ掌聲

國軍大將校団ノ團結ニ就テ深ク考メサ
セム

曾根少尉ノ雅懷

花ノ道知ルノ道ノ道

感涙

作業ノ深更ノ道

七日 金曜

築艦・警備ノ修
船長・政委・決

心ヲ大ヤクニテ行ケ
文句ヲ云ヒ
遠ニ故心ハ山ニテ
歎ノ

一日
上唯

大詔奉記式
十時大船出ニ船體當ニ古港大
征進マ何処ニ我等ノ國心ニ所ニ都大
唯々甲有宗等ノ傳流ニ塔ニタシ
於所ノ深カク先ニ分ニ於何ニテ曾心
守護ニ大徳ニ集身ニシテ

敬
拜

聖
國

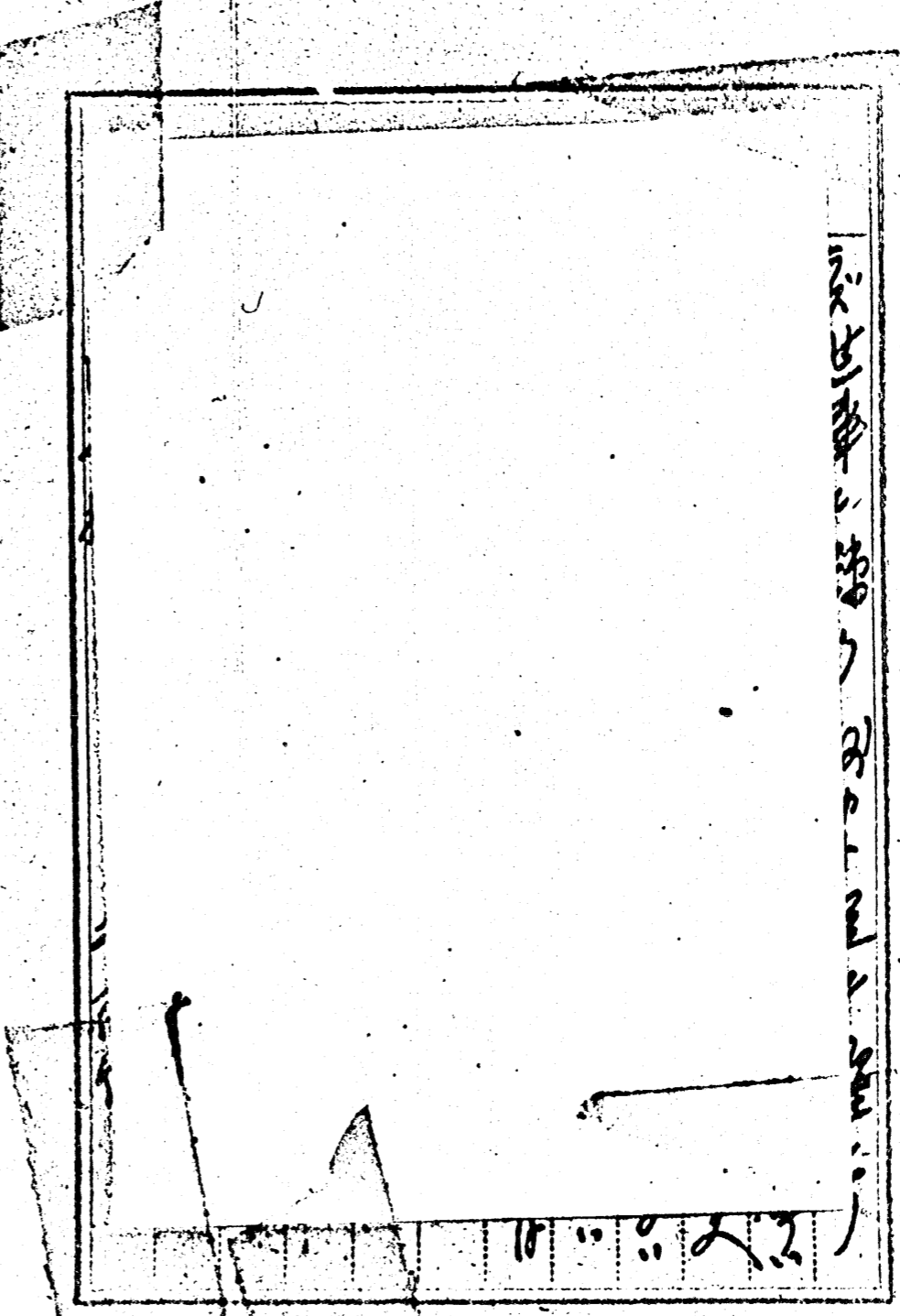
極
海

極
海

極
海

此日極星リ勝心ニ風ナリ極メテ靜
極ナリ内海ノ波鏡ノ如ク
午後西鏡候補ヒテ沖鏡ニ方ノ
極鏡ヲ伺ヒテ甲極ニタシ
遠ニ龍眼ニ波ノ山ニ此ノソノ者ニテ
有宗等ノ向有ニ思ヒテ故山ナリ
遠ニ行リ甲極ニ立テテ西面鏡候補メ
知覺ニ思證ニ表心感得ノ行リテ終ニ
ト昔ニ御果ノ御有宗ナリテ新ノ信ヲ有シ
遠ニ行リ甲極ニ立テテ西面鏡候補メ
故心ヲ離レテ生息ニ離レテ一途
御果ニ遠ニ遠ニテ之ニ思ヒテ死

十日
 又書籍...
 親戚者...
 何卒直教...



此が...

10...

静

南の海
浪の石

中城に在りて
船の行進中、船中不礼の儀
に在り
林の謀に、等々同文の如く、
力強々威す
社(子言)の那覇下三向
中一宮女枝の海心

十日
上曜

厚司命の命、今迄の如く、
果て、大東の島、
神の最前、我々の如く

静

舟の
静

電光石火
以下、我々の如く、
大、訓示、
訓示、
成候、
乾草也、
林の如く、
内田の如く、
海心、
午後船の如く、
不敬意、